

特集 伝えたい！ 平和への思い



「安らかに眠って下さい
過ちは 繰返しませぬから」
平和公園の原爆死没者慰霊碑に
刻まれた言葉です。
戦争という過ちを再び
繰り返さないために
語り継ぎたい、被爆の惨状。
そして平和への思い。

市中心部は相当な熱気だったと思います。煙の間から川に飛び込む姿が見えました。よく水を求めて被爆者が川へ飛び込んだと言われますが、それだけではなく、ヤケドの熱さと火災の熱気で熱くてたまらなかつたのだと思います。これから三日三晩、広島は燃え盛り、死の灰となりました。庁舎内では、至るところにガラスの破片が飛び散り、職員も数人がケガをしていました。応急手当をして陸軍病院へ連れて行く途中、「助けてくれ、助けてくれ」という叫び声が四方八方で聞こえてきました。また、病院内では、ズルズルのひどいやけどを負った重傷患者であふれ、手の施しようがない状態でした。



昨年の山内原爆犠牲者慰霊式典で焼香する加藤さん



国内外から多くの方が訪れる
広島市の平和公園



した。結局、この日は火災がひどく、鷹野橋付近から先には行けませんでした。この痛ましい惨状は63年経った今でも忘れることはできません。特に、かわいい幼子が「お母ちゃん、お姉ちゃん助けてー」と叫んで天国に旅立たれた姿、川から無数の死体を引き上げる姿には心が痛みました。一夜明け、8月7日の9時ごろ、わたしは気象台の

屋上で風向き、風速の観測をしていたところ、「パン！パン！」と小型戦闘機が漁船めがけて機関銃を発射しました。すると、また別の機が飛んできて、わたしの方へ機関銃の砲身を向けたため、わたしは慌てて室内に逃げ込み、なんとか死を逃れました。広島を脱部を跡形もなく焼き尽くし、何万人という尊い命を奪ったにも関わらず、こうまで

皆殺しにするのかと思うと腹が立ってたまりませんでした。生き残った被爆者は、肉体的にも、精神的にも一生悩み続けて人生に終止符を打たなければなりません。再び、このような事がないように、永久に核兵器の廃絶と世界人類の恒久平和の確立を、子々孫々に強く伝えなければならぬと思います。



山内地区原爆被爆者の会
会長 加藤照明さん

語る

被爆直後の ヒロシマを一望

痛ましい惨状が忘れられない

かとう・てるあき
本郷町。平成13年に結成した「山内地区原爆被爆者の会」の代表を務める。平成14年～16年にかけて、被爆体験記「葛城」を発行したほか、定期的に広報紙や講演会を開催するなど、被爆体験の悲惨さを継承している。

昭和20年8月6日、わたしは庄原実業高校を卒業して、江波山にある広島気象台に勤務していました。当時、19歳でした。

この日の朝は、7時9分にラジオで「中国管区情報、敵B29機広島市西北方上空を旋回中」と警戒警報が発令されましたが、7時31分には解除されました。わたしは観測室で、予報官が作成した天気図を見て、「今日も良い天気だから、午後もB29がやってくるかな」と思ったその時、観測室の窓ガラスが一瞬目がくらむような閃光が映り、何だろ

うと観測室の玄関口を出た途端、「ドーン」という爆音が聞こえました。

これは普通の爆弾ではないと直感したわたしは、急いで2階に昇って市内一円を展望しました。すると驚くことに将棋倒しのようになり全壊しているではありませんか。あまりの惨状に、ぼうぜんとう立ちすくんでいると、横川方面からパッと火の手が上がり、見る見るうちに全域が火の海になりました。ちょうどこの時間帯が陸風と海風が静止する「なぎ」で、煙も火も上昇せずに横に這い出しました。



庄原市戦没者追悼式 並びに平和祈念式典



本市の戦没者に哀悼の意を表すとともに、恒久平和を祈念するため、庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典を次のとおり開催します。

多くの皆さんの参加をお願いします。
とき 8月27日(水) 10時～
ところ 庄原市民会館

※当日は要約筆記による案内、各支所からの送迎バスを用意しています。また、イントラネットでの中継も行いますので、各学校、公民館（自治振興センター）などで式典をご覧いただけます。

送迎バスの利用は、8月15日(金)までに各支所へ申し込みください。(定員がありますので、ご希望に沿えない場合はご了承ください。)

問い合わせ

社会福祉課 ☎0824-73-1210

西城支所保健福祉室 ☎0824-82-2202

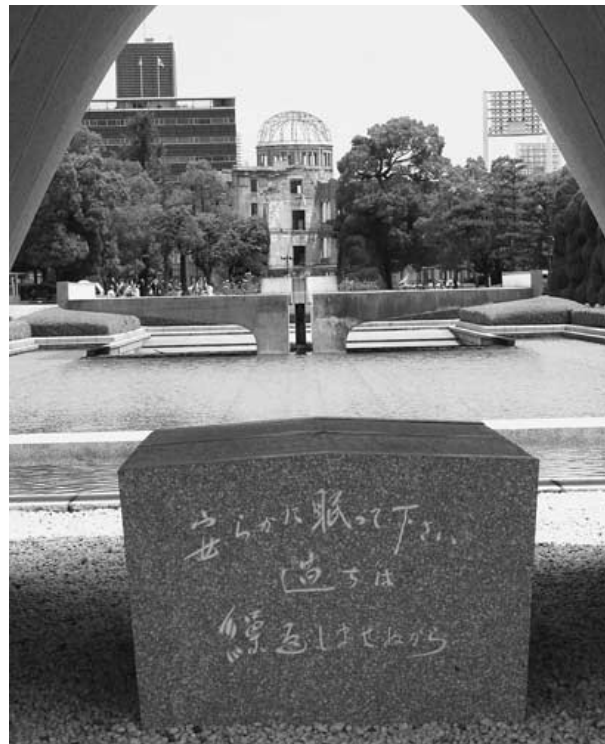
東城支所保健福祉室 ☎08477-2-5131

口和支所市民生活室 ☎0824-87-2114

高野支所市民生活室 ☎0824-86-2114

比和支所市民生活室 ☎0824-85-3002

総領支所市民生活室 ☎0824-88-3110



ました。先生は「これまでこの歌を何度も歌ったけど、こんなにすばらしい合唱は初めて。朗読会で感じたものが大きかったのでしょう」と話していました。子どもたちの素直な感性に、「わたしたちの方が大きな感動と元気をもらいました」と3人は目を潤ませていました。

本年度から、朗読に合わせてスクリーンに写真を映し出すなど、映像協力している口和支所教育係の才木

雅仁係長は「3人のすばらしい活動に触れ、市内各地で宣伝している。このような市民活動をどんどん伸ばしていくことが、平和につながるのではないかと期待を寄せていました。被爆から60年が過ぎ、子どもたちの親はもちろん、そのおじいさん、おばあさんも戦争を知らない世代となり、家庭の中で戦争体験を語り継ぐことが困難な状況です。しかし、朗読を通じて被爆者の思いや原爆が



原爆の写真をスクリーンに映し、朗読する「口和本の会」

被爆から60年以上が経過し、被爆体験の継承が切実に求められています。そんな中、口和町の読み聞かせグループ「口和本の会」は、被爆体験記の朗読会を小中学校などで開催しています。

きっかけになったのは、同会の岩瀧朋子さんが国立広島原爆死没者追悼平和祈念館（広島市中区）の「被爆体験記を読み語るプロジェクト」に出合ったこと。

「子育てから開放され、社会に貢献できる活動がしたい。しかも、口和町だけでなく、もっと幅広く活動できる場がないか」と思っていた岩瀧さんは、新聞記事の朗読ボランティア募集に目が止まり、広島市へ研修に通いました。

この朗読ボランティアは、被爆体験記や原爆詩を読み語ることによって、幅広い人々と被爆者の記憶や思いを共有し、次世代へと引き継いでいくことが役目。研修で、被爆の実態や元アナウンサーから朗読の実践を学びました。

研修を終えた岩瀧さんは、広島市内の小中学校や祈念館だけでなく、地元の小中学校でも朗読会をしたいと考えました。この思いに、「土曜本の会」で一緒に読み聞かせのボランティアをしていた川崎弘子さんと花本弘子さんも賛同。被爆体験記を朗読する「口和本の会」を3人で立ち上げました。また、そのことを聞いた口和公民館の山岡芳晴館長は「朗読会を公民館事業でしたらどうか。何か後ろ盾があった方が活動しやすいし、受付窓口も公民館が引き受けよう」と支援に乗り出しました。

平成17年7月、口北小学校で「被爆体験記朗読会」を初めて開催して以来、市内の小中学校をはじめ老人会などにも招かれるようになり、活動の場が徐々に広がっています。

本年7月18日の川北小学校では、原爆被害の概要を紹介するビデオの後、3人が生々しい被爆体験記と原爆詩を語りかけるように朗読すると、児童たちは家族や友人を失った悲しみ、焼け野原になった街の惨状を思い描きながら、悲しそうな表情で、真剣に聞き入りました。原爆の恐ろしさから、時折大きく深呼吸したり、息を飲み込んだり…。最後に児童全員で平和への祈りを込めて、原爆の歌「おりづる」を大声で歌い



左から岩瀧さん、花本さん、川崎さん



真剣な表情で朗読を聞く川北小の児童